

令和7年度大学入学共通テスト
(数学)の問題分析
～ここ数年の共通テストも踏まえて～

牛瀧 文宏

京都産業大学理学部長

最初に

- 大学入学共通テストに関わっておられる、すべての方々に敬意を表したいと思います。
- 今回は学習指導要領の改訂に伴い、様々なご苦勞があったものと拝察いたします。

本日の講演 の流れ

- 簡単な自己紹介とこれまでの活動
- 令和7年実施の「数学」の試験について
- 新課程特有の問題
- 個別の問題
- 令和7年実施の「情報」の試験について

共通テスト関連で

日本数学会教育委員会委員長時代に、高大接続改革の話題の中で、大学入学共通テストの話題を含むシンポジウムを数回開催。数学通信にも記事を掲載

民間のオンライン学習塾からの依頼を受けて、解説動画に出演（令和6年実施分まで）

過去のシンポジウム等 で話題にしたこと

当時巷では、共通テストにかわって「記述式」が導入されることを大きく報道されているが、大きな変化が他にもある点

具体的には. . .

読む量（問題文の量）の増加

対話を含む問題の出題

現実をモデルにした問題の出題

ICTを活用した場面設定

式、命題、条件、グラフなどを選択させる問題が増加した

オンライン塾の動画 で語っていること

- 数学的背景
- 数学的な関連事項
- 問題の見方
- 問題の次を考えてほしいこと（仮説を持って問題を読み込む）
- 出題者が出題したかったかもしれないこと
- 授業や課題学習で活用してほしいこと（先生方に対して）

あまり語っていないこと

- 解き方
- 難易度
- 問題の傾向
- 高得点の取り方や問題ごとの時間配分については全く語っていない

2025年実施 数学Ⅰ, 数学A 新旧比較

新課程

旧課程

出題範囲	新課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
数と式	第1問[1]	10	2	必答	第1問[1]	10	2	必答
図形と計量	第1問[2]	20	4		第1問[2]	20	4	
二次関数	第2問[1]	15	6		第2問[1]	15	6	
データの分析	第2問[2]	15	7		第2問[2]	15	7	
場合の数と確率	第3問	20	4		第3問	20	4	
図形の性質	第4問	20	4		第5問	20	4	2問選択
整数の性質					第4問	20	4	

着色セルは新旧同一問題を表す。

2025年実施追試 数学Ⅰ, 数学A 新旧比較

新課程

旧課程

出題範囲	新課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
数と式	第1問[1]	10	2	必答	第1問[1]	10	2	必答
図形と計量	第1問[2]	20	6		第1問[2]	20	6	
二次関数	第2問[1]	15	4		第2問[1]	15	4	
データの分析	第2問[2]	15	7		第2問[2]	15	7	
場合の数と確率	第4問	20	4		第3問	20	4	2問選択
図形の性質	第3問	20	4		第5問	20	4	
整数の性質				第4問	20	4		

新旧課程ともに、第1問[2]は三角比の表と平方根の表を含む。
着色セルは新旧同一問題を表す。

2024 数学I,A

出題範囲	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
数と式	第1問[1]	10	2	必答
図形と計量	第1問[2]	20	6	
二次関数	第2問[1]	15	2	
データの分析	第2問[2]	15	7	
場合の数と確率	第3問	20	4	2問選択
図形の性質	第5問	20	4	
整数の性質	第4問	20	4	

試行問題 数学I,A

出題範囲	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
数と式	第1問[1]	10	2	必答
図形と計量	第1問[2]	20	3	
二次関数	第2問[1]	15	4	
データの分析	第2問[2]	15	6	
場合の数と確率	第3問	20	4	
図形の性質	第4問	20	2	
整数の性質				

試行問題はフォーマットが異なるので、ページ数の単純比較はできない。

数学I, 数学Aの新旧比較

-
- 旧課程、新課程ともに共通テストでは70分で6問解く。
 - 数学I の範囲が60点、数学Aの範囲が40点。
 - 数学I は全範囲から出題される。
 - 旧課程では数学Aの「場合の数・確率」「図形」「整数」から選択できたが、新課程では「場合の数・確率」「図形」が必答。
 - 新課程では、「データの分析」に仮説検定の考え方が、「場合の数・確率」に期待値が含まれている。試行問題と2025年の本試験にはともに出題されている。
 - 会話を含む問題、現実に基づく問題などは健在。

2025年実施 数学II, 数学B, 数学C 新旧比較

出題範囲	新課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
いろいろな式								
図形と方程式					第4問	16	6	必答
指数関数・対数関数	第2問	15	6	必答	第2問	15	6	
三角関数	第1問	15	4		第1問	15	4	
微分・積分の考え	第3問	22	4		第3問	22	4	
数列	第4問	16	5	3問選択	第6問	16	5	2問選択
統計的な推測 (旧；確率分布と統計 的な推測)	第5問	16	7		第5問	16	6	
ベクトル	第6問	16	4		第7問	16	4	
平面上の曲線と 複素数平面	第7問	16	6					

新旧課程ともに、第2問は常用対数表を、第5問は正規分布表を含む。
着色セルは新旧同一問題を表す。

2025年実施追試 数学II, 数学B, 数学C 新旧比較

出題範囲	新課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
いろいろな式	第1問	15	4	必答	第1問	15	4	必答
図形と方程式	第2問	15	5		第2問	15	5	
指数関数・対数関数								
三角関数					第4問	16	6	
微分・積分の考え	第3問	22	4	3問選択	第3問	22	4	2問選択
数列	第4問	16	4		第6問	16	5	
統計的な推測 (旧；確率分布と統計 的な推測)	第5問	16	6		第5問	16	6	
ベクトル	第6問	16	4		第7問	16	4	
平面上の曲線と 複素数平面	第7問	16	5					

新旧課程ともに、第5問は正規分布表を含む。
着色セルは新旧同一問題を表す。

2024 数学II,B

出題範囲	旧課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
いろいろな式	第1問[2]	15	4	必答
図形と方程式				
指数関数・対数関数	第1問[1]	15	4	
三角関数				
微分・積分の考え	第2問	30	6	2問選択
数列	第4問	20	4	
確率分布と統計的な推測	第3問	20	5	
ベクトル	第5問	20	3	
平面上の曲線と複素数平面				

試行問題 数学II,B,C

出題範囲	新課程問題番号	配点	ページ数	必答・選択
いろいろな式				
図形と方程式				
指数関数・対数関数	第2問	15	2	必答
三角関数	第1問	15	2	
微分・積分の考え	第3問	22	3	
数列	第4問	16	2	3問選択
統計的な推測 (旧；確率分布と統計的な推測)	第5問	16	4	
ベクトル	第6問	16	4	
平面上の曲線と複素数平面	第7問	16	4	

試行問題はフォーマットが異なるので、ページ数の単純比較はできない。

数学II, 数学B, 数学Cの新旧比較

-
- 旧課程では60分、新課程では70分。
 - 数学IIの部分の配点が、昨年までは60点、今年度の旧課程問題では68点、今年度の新課程問題では52点。
 - 問題数について、昨年度までは実質5問。今年度の旧課程問題では実質6問。今年度の新課程問題でも実質6問。
 - 数学IIの部分での出題単元は年によって異なる。
 - 会話を含む問題、現実に基づく問題などは健在。

新課程になって新しく出題された部分

仮説検定の考え方

期待値

平面上の曲線と
複素数平面

2025年実施 数学I, A, 第2問[2]

(3) 太郎さんが住む地域では、その地域に宿泊を促すためのキャンペーンとして、キャンペーンA, Bが実施されている。

太郎さんは、キャンペーンAの方がよいと思っている人が多いといううわさを聞いた。このうわさのとおり、キャンペーンAの方がよいと思っている人が多いといえるかどうかを確かめることにした。そこで、かたよりなく選んだ人たちに、キャンペーンA, Bのどちらがよいかについて、二択のアンケートを行ったところ、アンケートに回答した35人のうち、23人が「キャンペーンAの方がよい」と答えた。この結果から、一般にキャンペーンAの方がよいと思っている人が多いといえるかどうかを、次の方針で考えることにした。

方針

- “「キャンペーン A の方がよい」と回答する割合と「キャンペーン B の方がよい」と回答する割合は等しい”という仮説を立てる。
- この仮説のもとで、かたよりなく選ばれた 35 人のうち 23 人以上が「キャンペーン A の方がよい」と回答する確率が 5 % 未満であれば、その仮説は誤っていると判断し、5 % 以上であればその仮説は誤っているとは判断しない。

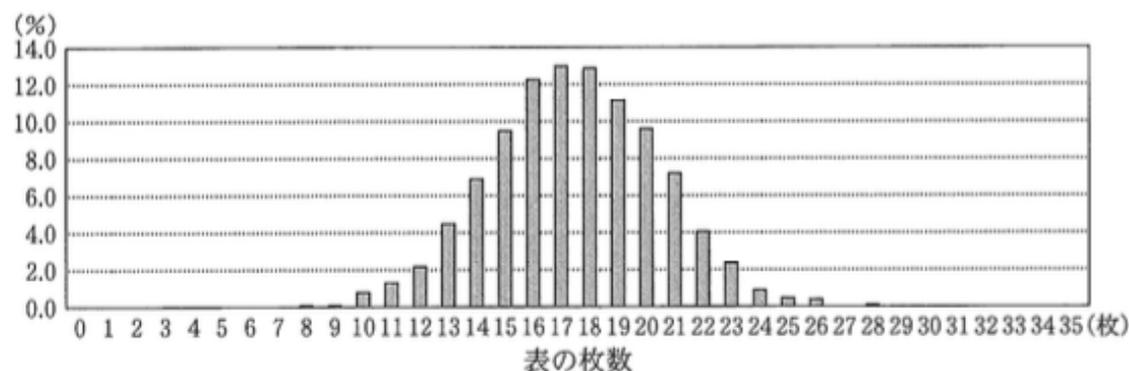
後の実験結果は、35 枚の硬貨を投げる実験を 1000 回行ったとき、表が出た枚数ごとの回数の割合を示したものである。

(数学 I、数学 A 第 2 問は次ページに続く。)

後略

実験結果

表の枚数(枚)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
割合(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.8	1.3
表の枚数(枚)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
割合(%)	2.2	4.5	6.9	9.5	12.3	13.0	12.9	11.2	9.6	7.2	4.1	2.4
表の枚数(枚)	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
割合(%)	0.9	0.5	0.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0



実験結果を用いると、35枚の硬貨のうち23枚以上が表となった割合は、、%である。これを、35人のうち23人以上が「キャンペーンAの方がよい」と回答する確率とみなし、方針に従うと、「「キャンペーンAの方がよい」と回答する割合と「キャンペーンBの方がよい」と回答する割合は等しい」という仮説は。したがって、今回のアンケート結果からは、キャンペーンAの方がよいと思っている人が.

この問題について

-
- 仮説検定の問題。
 - 追試験では出題されていない範囲。
 - 新課程の試行問題でも同様のものが出題されている。同様の表とグラフが書かれている。

2025年実施 数学I, A, 第4問

ある行事で、主催者が次のゲームを計画している。

ゲーム

参加者はくじを最大3回引き、当たりが出たら、1200円相当の景品を主催者から受け取り、以降はくじを引かない。参加者はくじを1回目、2回目、3回目で異なる箱から引く。1回目のくじ引きで当たりが出なかった場合は2回目のくじを引く、2回目のくじ引きでも当たりが出なかった場合は3回目のくじを引く。主催者は、当たりの出る確率について次のとおり設定する。

- 1回目に当たりが出る確率は $\frac{3}{16}$ である。
- 1回目に当たりが出ず、かつ2回目に当たりが出る確率は $\frac{1}{8}$ である。
- 1回目、2回目ともに当たりが出ず、かつ3回目に当たりが出る確率は $\frac{1}{16}$ である。

ゲームの参加料について、主催者は2種類の支払い方法を考えている。参加料に関する設定の妥当性について、主催者は判断を行う。

中略

支払い方法 1

参加者は1回目のくじを引く直前に参加料 500 円を支払う。

中略

支払い方法 2

参加者は1回目、2回目、3回目のくじを引く直前にそれぞれ料金 a 円を支払う。なお、この料金をくじ引き料といい、当たりが出た後は、くじを引かないため、くじ引き料を支払わないことになる。

後略

この問題について

-
- 期待値をメインにおいた問題。
 - 1回のゲームに対して、主催者が負担する金額の期待値と、2種類の支払い方法で得られる収入や収入の期待値とを比べて、設定の妥当性を考える問題。
 - 追試験では出題されていない範囲。
 - 期待値を2種類計算させている。
 - これまで選択だった「場合の数と確率」が必答問題になった。

2025年実施 数学II, B, C 追試験第3問

数学II, 数学B, 数学C 第4問～第7問は、いずれか3問を選択し、解答しなさい。

第7問 (選択問題) (配点 16)

(1) 複素数平面上で方程式

$$|z - 1| + |z + 1| = 4 \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

を満たす点 z 全体がどのような図形かを考える。

(i) 方程式①は ア が一定であることを表している。

選択肢 略

(ii) x, y を実数とし, $z = x + yi$ とおくと, 方程式①は

$$\sqrt{(x-1)^2 + \boxed{\text{イ}}^2} = 4 - \sqrt{\boxed{\text{ウ}}^2 + y^2}$$

と変形できる。

両辺を2乗して計算すると

$$\boxed{\text{エ}} = 2\sqrt{\boxed{\text{ウ}}^2 + y^2}$$

となる。

さらに両辺を2乗して計算すると

$$\boxed{\text{オ}} = 1 \dots\dots\dots \text{②}$$

となる。

(数学Ⅱ, 数学B, 数学C第7問は次ページに続く。)

選択肢 略

(iii) (i), (ii) から, 複素数平面上で方程式①を満たす点 z 全体は, 複素数平面上における $\boxed{\text{カ}}$ である。

ただし, 複素数平面上で方程式①を満たす点 $z = x + yi$ 全体は, 座標平面上で方程式②を満たす点 (x, y) 全体と同じ図形であることに注意する。

カ の解答群

- ① 点 $1 - i$ を中心とする半径 4 の円
- ② 点 $-1 + i$ を中心とする半径 4 の円
- ③ 2点 $1, -1$ を焦点とし、長軸の長さが 4 の楕円
- ④ 2点 $i, -i$ を焦点とし、長軸の長さが 4 の楕円
- ⑤ 2点 $1, -1$ を焦点とし、長軸の長さが 8 の楕円
- ⑥ 2点 $i, -i$ を焦点とし、長軸の長さが 8 の楕円
- ⑦ 2点 $\sqrt{7}, -\sqrt{7}$ を焦点とし、2点 $\sqrt{3}, -\sqrt{3}$ が頂点の双曲線
- ⑧ 2点 $\sqrt{7}i, -\sqrt{7}i$ を焦点とし、2点 $\sqrt{3}i, -\sqrt{3}i$ が頂点の双曲線
- ⑨ 2点 $\sqrt{7}, -\sqrt{7}$ を焦点とし、2点 $2, -2$ が頂点の双曲線
- ⑩ 2点 $\sqrt{7}i, -\sqrt{7}i$ を焦点とし、2点 $2i, -2i$ が頂点の双曲線

この問題について

-
- 複素数平面で楕円を考えることで、「複素数平面」と「平面上の曲線」の2単元の問題を両方とも出題できている。
 - 選択肢にも、楕円や双曲線、焦点などの語句が見られる。
 - 本試験の方は、「複素数平面」の問題だけで1問。
 - ちなみに、試行問題では、「平面上の曲線」と「複素数平面」の問題が1題ずつ出題されていた。
 - 複素数のままでも解けるのに、 (x,y) に直して計算させているのは、平面上の曲線の学習に繋がらなかったからか？
 - 続いて、 0 の周りに楕円を回転させる。



他の個別の問題
について

2025年実施 数学I, A, 第1問[2]

〔2〕 図1のように、直線 l 上の点Aにおいて l に接する半径2の円を円Oとし、 l 上の点Bにおいて l に接する半径4の円を円O'とする。円OとO'は2点で交わり、その交点をP、Qとする。ただし、 $\angle APB < \angle AQB$ とする。さらに、 $\angle PAB$ は鋭角であるとする。このとき、 $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ について考えよう。

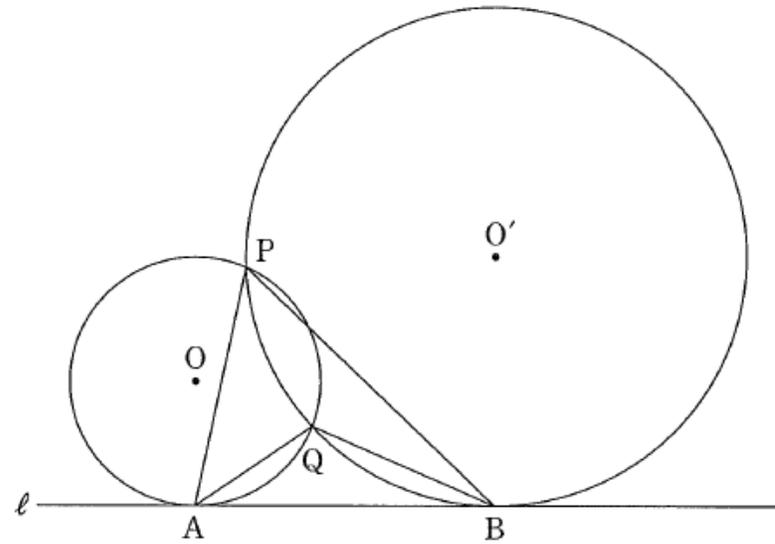


図 1

問題のあらすじ

- (1) これだけの情報から、誘導に従って、 $\triangle PAB$ の外接円の半径を求める。
- 次の会話に続いて、 $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ の外接円の半径、角 APB および角 AQB の正弦の大きさの比較をする。

(2) 太郎さんと花子さんは、(1)の考察を振り返っている。

太郎： $\triangle QAB$ の外接円の半径も求められるかな。

花子：(1)の R_1 の求め方を参考にすればよさそうだね。

- (3) 太郎さんと花子さんは、これまでの考察をもとに、 $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ の辺の長さについて考えている。

太郎：ABの長さが与えられれば、PAとQAの長さが求められそうですね。

花子： $\angle APB < \angle AQB$ に注意して求めてみようよ。

$AB = 2\sqrt{7}$ とする。このとき

$$\sin \angle APB = \frac{\sqrt{\boxed{\text{トナ}}}}{\boxed{=}}$$

である。(1)より、 $PB = \sqrt{\boxed{\text{ソ}}}$ PA であるから

$$PA = \sqrt{\boxed{\text{ヌネ}}}$$

である。

同様に、 $QA = \sqrt{7}$ であることがわかる。

この問題について

-
- $\triangle PAB$ の外接円の半径の長さを求めるに際し、 AB の長さを用いない。生徒は解いている時に、このことに気づかないかもしれないが、最後の(3)で振り返れるようになっている。2つの外接円の半径の長さが AB の長さに対して不変であることに気づくことで、生徒が数学的な考え方に至れるようになっている。
 - $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ の外接円の半径が等しいことや、角 APB と角 AQB の和が2直角になることは、初等幾何学的にも容易く証明でき、生徒の学びが広がるように配慮されている。
 - その反面、数学Aの「図形の性質」(必答)と合わせると、全体として図形分野に比重が置かれたセットだという印象を受ける。

2025年実施 数学II, B, C 第3問

第3問 (必答問題) (配点 22)

k を 0 でない実数とし、 $f(x)$ を 2 次関数とする。 $F(x)$ と $G(x)$ はどちらも導関数が $f(x)$ であるような関数で、 $F(x)$ は $x = 0$ で極小値 0 をとり、 $G(x)$ は $x = k$ で極大値 0 をとるとする。

(2) 次に、 $k > 0$ の場合を考える。

このとき、 $F(x)$ と $G(x)$ に関する条件から、 $y = F(x)$ のグラフと $F(x)$ 、 $G(x)$ の極値について調べよう。

(1)略

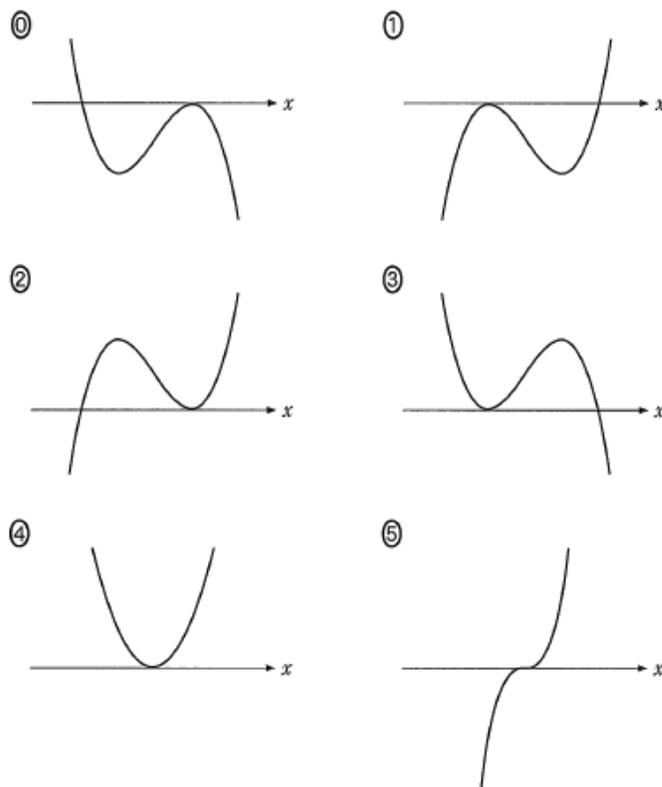
(i) $F(x)$ が $x = 0$ で極小値をとることから、 $f(0) = \boxed{\text{コ}}$ であり、 $x = 0$ の前後で $f(x)$ の符号は $\boxed{\text{サ}}$ 。さらに、 $G(x)$ が $x = k$ で極大値をとることから、 $f(k) = \boxed{\text{シ}}$ であり、 $x = k$ の前後で $f(x)$ の符号は $\boxed{\text{ス}}$ 。したがって、 $F(x)$ の導関数は $f(x)$ であることに注意すると、座標平面において $y = F(x)$ のグラフの概形は $\boxed{\text{セ}}$ であることがわかる。

(数学II、数学B、数学C第3問は次ページに続く。)

サ, ス の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

- ① 負から正に変わる ② 正から負に変わる
③ 変わらない

セ については、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。なお、 y 軸は省略しているが、上方向が正の方向であり、 x 軸は直線 $y = 0$ を表している。



(数学Ⅱ、数学B、数学C第3問は次ページに続く。)

この問題について

- 計算しない、微分の問題。
- 同様に計算しない微積の問題は、2025年の追試験でも登場している。
- 難しくはないが、操作的な計算で、関数の増減を捉える以上の「説明力」を求めている。

2025年実施
旧数学I, A,
第4問より

(4) 次の命題 (a), (b), (c) の真偽の組合せとして正しいものは 夕 である。

- (a) 702 との最大公約数が 9 であり, かつ 23 で割った余りが 4 である正の整数が存在する。
- (b) 702 との最大公約数が 9 であり, かつ 24 で割った余りが 7 である正の整数が存在する。
- (c) 702 との最大公約数が 9 であり, かつ 24 で割った余りが 6 である正の整数が存在する。

夕 の解答群

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
(a)	真	真	真	真	偽	偽	偽
(b)	真	真	偽	偽	真	真	偽
(c)	真	偽	真	偽	真	偽	真

この問題について

-
- 方程式といえば、解を求めることを第一とするかもしれないが、この問題では、解の有無だけにとどめている。
 - このような「整数の性質」の問題は新課程にはない。

2024実施 数学II, B 第3問

数学Ⅱ・数学B 第3問～第5問は、いずれか2問を選択し、解答しなさい。

第3問 (選択問題) (配点 20)

以下の問題を解答するにあたっては、必要に応じて47ページの正規分布表を用いてもよい。また、ここでの晴れの定義については、気象庁の天気概況の「快晴」または「晴」とする。

(1) 太郎さんは、自分が住んでいる地域において、日曜日に晴れとなる確率を考えている。

晴れの場合は1、晴れ以外の場合は0の値をとる確率変数を X と定義する。また、 $X = 1$ である確率を p とすると、その確率分布は表1のようになる。

表 1

X	0	1	計
確率	$1 - p$	p	1

中略

ここで、 U_k の期待値を求めてみよう。(1)における p の値を $p = \frac{1}{4}$ とする。

$k = 4$ のとき、 U_4 の期待値は

$$E(U_4) = \frac{\boxed{\text{カ}}}{128}$$

となる。 $k = 5$ のとき、 U_5 の期待値は

$$E(U_5) = \frac{\boxed{\text{キク}}}{1024}$$

となる。

4以上の k について、 k と $E(U_k)$ の関係を詳しく調べると、座標平面上の点 $(4, E(U_4))$ 、 $(5, E(U_5))$ 、 \dots 、 $(300, E(U_{300}))$ は一つの直線上にあることがわかる。この事実によって

$$E(U_{300}) = \frac{\boxed{\text{ケコ}}}{\boxed{\text{サ}}}$$

となる。

この問題について

-
- 「詳しく調べると」という書き方に出題者の思いが感じられる。時間内に解くことは難しいものでも、数学的に面白い事象を提示したいということか。一次関数になることをヒントで与えているので、導入された値を利用することでストレスなく解ける。
 - 一方で、「詳しく調べると」とあるので、調べなければならないことも伝わる。
 - 少し難しいが、高等学校での課題学習に用いることも可能。

数学の問題への全体的感想 1

- 会話の問題について、会話に至るまでの思考、実験、観察等に要した現実的時間を考えると、それらの背景を試験時間内に理解して、さらに次を解くというのは、学習活動をはじめとして、現実的なのだろうか。
- 習得・活用・探究という学習の流れを具現化したい気持ちは伝わる。点数が取れる問題の必要もわかる。しかし、自分の思う解法で解けない点や、数ページ先を読まないでゴールが見えないという点は、私には解きづらい。
- 初期に比べて短くはなっているが、読む量が多い。
- 与えられた図形は本当に存在するのだろうか、などと考える時間はない。

数学の問題への全体を通じての感想 2

- 問題文は長いものの、多くの問題から配慮は感じられる。
- 一通りの解法や、誘導に従って解けたら終わりということではなく、課題学習に使える問題が含まれている。この点が、対話による思考の深め方だけではなく、出題された問題そのものからも感じられる。高等学校で、そのような点も含めて授業されると、問題をうまく活用できると思う。
- 課題学習に困っている学校は、活用するといいと考える。

情報Ⅰを解いてみた感想

「お買い物（店舗とネット）」をはじめとして、2割から3割程度、常識でわかる。（運転免許試験に、勉強をしなくても普段の生活経験で解ける問題が含まれている、という感覚に似ていた。）

逆に、そういう経験に乏しい生徒には難しいかもしれない。

数学I,A程度の知識が必要。特に、場合の数と確率。

誤り訂正の問題など、数学的センスがある方がいい問題もある。

数学の課題学習に使えるような問題もある。

情報Ⅰの「統計」に関して問題について

数学と共有できる知識が多い。散布図や相関係数の意味がわかっていたら解ける問題が多い。計算らしい計算はない。

棒グラフ、帯グラフなども登場。

比例尺度、間隔尺度、順序尺度、名義尺度などという言葉は数学では出てこない。地方名や旅行者数がこのうち、何に当たるかを問う問題がある。

2025実施 情報| 第2問 から

1月1日

LikeWing
駒谷南店
登録番号:T9999999999999
電話:0XX-XXX-XXX 店コード:3333
AAA県AAA町AA1-1

①レジの番号: 2025年1月xx日(月) 17:55
②担当店員名: 渡辺
③商品コード, 購入商品名: #2 2001

④購入した商品の個数: 1個
⑤購入した商品の合計金額: ¥1,193

⑥購入した商品の個数の合計: 3個

⑦お預かり合計金額: ¥1,500

⑧ポイントカードの利用可能ポイント数: 247P

⑨店コード: 3333

⑩購入時刻: 17:55

【領収書】

005011 除菌シート	1個	132
011221 コミック	1個	836
001561 スナック菓子	1個	225軽
合計		¥1,193
(内消費税等		¥104)
(10%対象		¥968)
(内消費税額		¥88)
(8%対象		¥225)
(内消費税額		¥16)
点数		3個

上記領収いたしました

お預かり合計 ¥1,500

お釣 ¥307

軽印は軽減税率対象商品です

ポイント会員ID *****1111
買上ポイント 10P
利用可能ポイント 247P

図1 レシートの例

問 1 次の文章を読み、空欄 ~ に入れるのに最も適当なものを、図 1 の ①~④のうちから一つずつ選べ。ただし、空欄 ・ の解答の順序は問わない。

LikeWing 全体での「時間帯ごとの総売上額(消費税込)」の比較を行うには、図 1 の「購入時刻」と に表されている情報から分析する。また、「曜日別の各商品の購入の状況」を把握するには、図 1 の「購入日、曜日」と と に表されている情報から分析する。

問 2 下線部(A)の分析によって得られない情報として最も適当なものを、次の ①~④のうちから一つ選べ。

- ① 顧客が商品を購入した理由。
- ② 同じ顧客に、繰り返し購入される傾向がある商品。
- ③ ある商品を多く購入している顧客の年齢層。
- ④ 年齢や性別の違いによる、来店する時間帯の傾向。

この問題について

常識の範囲で解ける。

この問題から生徒たちは
どういう学びに
繋げるのだろうか？

ご清聴ありがとうございました。

解いて終わりというだけの使い方ではなく、これらの問題が、生徒たちの学びに、さまざまに活用されることを期待しております。

牛瀧 文宏
京都産業大学理学部長